

とちぎ両爬の旅 in 塩原



4月29日、「栃木両生爬虫類の会」の仲間たち5名で、塩原方面の調査が行われた。上の写真の左から県立博物館の渡部さん（脊椎動物の骨格標本などを作製）、薄井さん（昆虫、特にフンコロガシが専門）、林さん（脊椎動物担当。両生類が専門）、そして水生昆虫が専門の小林さんの4名プラス佐高の青柳という面々である。



9時25分（気温12.5℃）。塩原での最初の両生爬虫類は、ひなたぼっこをしていたカナヘビだった。まだ体が十分暖まっていないせいか動きが鈍い。間近に見ると、その姿はまさに恐竜である。別に珍しい生き物というわけではないが、塩原にカナヘビが生息するという貴重な記録である。カナヘビには迷惑だったかもしれないが、大人気であった。



ところで、今回の調査の主な目的は、クロサンショウウオやトウホクサンショウウオなどの生息状況の確認である。この時期は、ちょうど産卵が終わっている頃なので、卵のう（卵の入った袋状のもの）が見つければ、そこにどのくらいの数が生息しているかがわかるのである。



9時40分（水温9.3℃）。池の中にクロサンショウウオの卵のうを発見（左下の写真の丸印）。5センチくらいの卵のうが約20個。バナナの房のように枝にくっついており、この中に卵が入っている。真ん中の写真は、通常の撮影であるが、右側の写真は水中写真である（渡部さんのカメラで撮影）。最近水中写真が撮れるデジカメが大人気で、こんな時に威力を発揮する。これはぜひとも欲しい！





午後は、大沼から夏沼、狩場沼、赤沼という沼めぐりのコースを辿ることにした。大沼は、6月になるとモリアオガエルが産卵することで有名だ。(モリアオガエルは、木の枝に白い泡で包まれた卵を生む。)今の時期は、クロサンショウウオの卵のうがあるはずなのであるが、見つけることはできなかった。

13時40分。トウホクサンショウウオの卵のうを発見(上から2枚目の写真)。トウホクサンショウウオは小さな沢の水たまりなどに産卵する。卵のうは透明で卵が透けて見える。写真(上から3枚目)のように、木の枝や石などに産み付けてある。なかなか見つからなかったので、この発見は本日のクリーンヒットである。

14時20分。夏沼でクロサンショウウオの卵のうを確認。ここまでで我々はかなり満足していたのだが、最後に大きなサプライズが待ち受けていた。

14時40分。狩場沼に沈んでいる木の枝全体が黄色く輝いて見える。(上から4枚目の写真)まさかと思ってよく見ると、木の枝一面にクロサンショウウオの卵のうが産み付けられている。その数は、少なく見積もっても200以上はある。初めて見る光景に思わず絶句し、見とれてしまった。

さらに最後の赤沼では、その数倍の規模の卵のうが見つかった。1000の大台を超えている可能性がある。水面は至る所で黄色い固まりが透けて見えている。まさにここはクロサンショウウオの楽園だ。「クロサンショウウオ万歳！」と叫びたくなるほどの感動である。こんな場所が栃木県には残っていたのである。(左下の写真)



↑トウホクサンショウウオの卵のう



↑クロサンショウウオの卵のう

16時25分。塩原の調査は大満足のうちに終わったが、セキツイ動物の骨格が専門の渡部さんには、さらに大きな喜びが文字通り横たわっていた。帰りの道路で、小動物が車に轢かれていたのだ。渡部さんは、すかさず車からダッシュしてこれを確保。この日一番の笑みを見せていたのが印象的だった。なお、この動物は「ハクビシン」で、渡部さんの手により、やがては骨格標本となるのであろう。素敵な仕事である。

ちなみに大阪市立自然史博物館には、「ホネホネ団」という組織があり、入団希望者には「入団試験」(タヌキ1匹を一人で皮剥き)があるそうである。



池が黄色く染まって見えるクロサンショウウオの卵のう



ハクビシンを手にする渡部さん